

をのねぶりを十人共舟と釋せり、詠歌本紀には、長夜の眠の中に十界を流轉する事とす、此を除
夜に枕の下に之く、吉夢を見てはつなぐといひ、凶夢を見てはながすといふ也、居家必要に、夢乘
船吉、夢船渡、主大富貴と見えたり、

〔華實年浪草〕十二月、寶船〔中略〕居家必用曰、夢乘船入日月吉、夢船渡、主大富貴云々、節序紀原曰、節
主人使奴星結柳作車、縛草爲船、載糠與棹、牛繫軛下引帆上檣、三揖窮鬼、而告之曰、聞子行有日矣、
鄙人不敢問所塗、竊具船與車、備載糠棹、日吉辰、長利行四方、按代醉、唐人以正月下旬送窮云々、

〔文晁畫談〕寶船の事正月十六日晁、節分の夜に内裏宿直のものに給ふ寶船の畫は、花園實久朝臣、猊
字は後陽成院宸翰にて、繪文字とも宸刻なり、略中寶船の板木は、萬治の火事に燒失せしを、京極

殿にありしをもて、翻刻せられたりしが、今つたへたる板木なり、内侍所に納めありて、節分の夜
宿直のものに今も賜はれり、

〔不忍文庫畫譜〕睦月に用る寶船のゑは、いつの頃より始りぬるにや、大永のころ、巽阿彌が記にみ
えたれば、其前よりや行はれぬらむ、いでや此一ひらは、かけまくもかしこき、後水尾院猊字を書

せ給ひて、御手づから板にゑらせ玉ひしとて、今も勘使所にひめおかるとかや、是をすりうつし
て、年ごとのむ月二日に諸臣に賜はるによりて、年をへてやつれぬれば、いまは新にものせしを

賜ふとぞ、然るにこれなむ御製作の板をすれるとみえて、いとこだいにて、かしこくともかしこ
し、六十八翁源弘賢敬書

〔嬉遊笑覽八〕初夢略中、或人云、今内裏より堂上がたに賜る舟の猊字は、後陽成院宸翰を刻させ
給ふとなり、又或説に、後小松院御夢に寶船を御覽じて、畫かせ給ふ猊字、即宸翰なりとぞ、いつれ

とも知らざれども、後説は非なるべし、

〔年中行事故實考十三〕たから船、猫といふ獸の形を書し繪をも用ゆ、猫食惡夢といふ説出所
を不見、これを屏風に圖して邪氣を避といふ説は、白居易が猫屏賛に見えたり、